



# 大いちょう

平成29年 8月29日  
さいたま市立高砂小学校

高砂小学校だより 平成29年度 No. 5 048 (829) 2737

## 母の残した遺産

校長 石山大介

2学期が始まりました。全員の元気な笑顔がそろって始業式ができ、とても嬉しく思っています。焼けた顔が、逞しく感じられます。

2学期は運動会や音楽会、社会科見学などの大きな行事があります。行事と日常の授業とのメリハリをしっかりつけて取り組み、自らを成長させていきましょう。

さて9月1日は「防災の日」。1923年（大正12年）9月1日、関東地方を中心に大きな地震（M 7.9）が襲ったことと、立春から210日目にあたる9月1日あたりは季節の変わり目で台風が幾度となく日本に上陸し、大きな被害を及ぼしていたということから、9月1日を「防災の日」として、災害に備えるようになりました。

私の母は、幼少の私たち兄妹を連れて外出すると、バスや電車に乗った時には必ず非常停止ボタンと非常口を確認して、私たちにその場所を教えました。大きな百貨店や宿泊施設、映画館に行くと、非常口を探して家族をそこまで連れて行き、避難する経路を確認するという念の入れようでした。

実際、幾度もそんなことが繰り返されると、私たち兄妹は「また？もうわかっているからいいよ」という気持ちになり、そうした母の行動を疎ましく思って、あからさまに態度に表すようにもなりましたが、母は聞き入れてくれませんでした。

この母の性分を、神経質を通り越し神経症と言ってしまうまでもかもしれませんが、無理もありません。昭和8年生まれ之母は、太平洋戦争終戦の昭和20年には12歳になっていました。爆弾が実際に隣の家に落ちて火事になったり、下校中に戦闘機からの攻撃を直接受けて、田んぼに飛び込んで難を逃れたりした経験をもっていたので、危機を予想して行動するという生き延びる術が、自然に身に付いていたのです。

平和な世の中に生まれ育った私たちには、母の経験したような危機は訪れることはありませんでした。しかし、母は「世の中、何があるかわからない。地震や火事、事故が今、起こるかもしれない」という危機感を常にもっていたのです。

母のこの習慣のおかげで、私自身、行く先々で非常口などを確認するようになっていました。その習慣は、完全に私に身に付いています。今は、母の残してくれたその習慣を誇りにさえ思っています。大きな遺産です。

「備えあれば憂いなし」という諺は、準備の大切さを表しています。災害や事故から身を守るにはそれなりの準備が必要です。手っ取り早いのは、お金をかけて非常用の物資の準備をすることですが、同時に心の構えを整えることが大切です。今までは「~だろう」と安易に考えていたことに対しても、「~かも知れない」という気持ちをもつだけで、心の中での危機管理は一步も二歩も前進します。「~かも知れない」という心の構えを整えて、防災はもちろん、交通安全や防犯などにも活かして安全な生活を送ってほしいと思います。

大きな学校行事が計画されている2学期。保護者、地域の皆様の温かいご理解とご支援をいただきながら、それら一つひとつが子どもたちにとって意義あるものになるよう取り組んで参りたいと存じます。

今学期もどうぞ宜しくお願いいたします。